

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	徳永直「文学サークル」論：長野県下のサークルと全農の関係性
Author(s)	萬田, 慶太
Citation	表現技術研究, 15 : 11 - 23
Issue Date	2020-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/49072
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049072
Right	
Relation	



徳永直「文学サークル」論

―長野県下のサークルと全農の関係性―

萬田 慶太

一 はじめに

一九五〇年代サークルの多様性が多数の研究者によって議論の俎上に上ってきた。一九五〇年代サークルは独自の社会運動としての側面があったと再評価されてきた⁽¹⁾。しかし、そもそも一九五〇年代サークルの概念は、一九三〇年代プロレタリア文学運動として日本共産党から提出されている。これは日本共産党が提唱した「一九三二年テーゼ」と呼ばれるものである。一九三〇年代にはじめて日本共産党は農村部にサークルを組織し、浸透することを主張した。それが一九五〇年代の戦後サークル設立のきっかけとなったのである。ところが、一九五〇年代サークル研究が活況を呈していたのとは逆に、一九三〇年代サークルの様相は近年まで明らかではなかった。一九三〇年代サークルは、一九五〇年代のラディカルさとは逆に、日本共産党に従順で、その結果壊滅し、その資料は残存していないと通説上されてきたのである⁽²⁾。

本論で取り上げる、徳永直の小説「文学サークル」（初出『中央公論』一九三三年一月、初刊単行本『〈新選プロレタリア文学総輯〉冬

枯れ』ナウカ社、一九三五年五月）は、一九三〇年代サークルの一端が表象される作品である。初出には「時日が制限されたのと、病気のために、ヒドク粗雑なものになったことを詫げる。この中にあるサークル活動については読者は批判的に読んで欲しい。」との「断りがき」が付された。「断りがき」以外には初出と初刊本間に大きな異同はない。「文学サークル」は全国農民組合（以下、全農⁽³⁾）によってサークルが改革されるという筋書きを有する。

「文学サークル」のあらすじを以下に示す。

蓼科山の麓にある「N県M郡K村O部落」の掲示板は自治体のピラでいっぱいである。ピラに予告された通り、農本主義者の金東成光が講演に来る。全農の喜作は金東に「夢みたいな」話だと反論し、喧嘩になってしまふ。金東に同じく反発した一郎が所属するサークルに喜作は参加を考える。サークルは没落地主の息子・一郎、歌人の泉などプチブルで構成されていた。プチブルだったサークルを喜作は全農の元に改良していく。サークルの出版活動によって、自治体の押し進める救農工事に対しては村では反対が決議される。最後に作家同盟N支部から古川がやってきて、全農の支持に賛成する。支部の協力によ

つてサークル祭が開催され、蓼科山にはじめてメーデー歌が響きわたるのだった。

「文学サークル」では、全農という組合と文化サークルの関係性が問題化されていた。サークルは詩や小説などの文化活動を行うものである。組合は賃上げ交渉やストライキなどを行うものである。根本的にサークルと組合は別性質の組織である。プロレタリア文学にとつて双方共に日本共産党の傘下にあることから、文化サークルという概念が打ち出された後も、明瞭には区別されていなかったようだ。小説「文学サークル」はプチブル的なサークルが全農という組合によってプロレタリア文学の農村重視の路線に目覚め、サークル活動を活性化させるという筋書きである。プロレタリア文学にとつては、サークルが農村重視の路線に目覚め、サークル人数を拡大し、長野支部や中央と連絡を取り、中央から音楽隊を招聘したことは、サークル活動の成功を意味した。サークルは農村問題に直接関わったサークル誌を発行するようになる。サークルは全農を通じて農村を理解し、村民から支持を獲得する。「文学サークル」は、「断りがき」の「批判的に読んで欲しい」との文言をのぞけば、全農と農村青年にサークルのとるべき大衆化の路線を見出そうとした小説として読める。

「文学サークル」の同時代評・先行研究は久米正雄による非プロレタリア陣営からの否定的評価のみである⁽⁴⁾。「文学サークル」の全農と一九三〇年代サークルの関係性の表象は検討されてこなかったと言える。

「文学サークル」を書くにあたっての徳永の取材は記録が残っている。浦西和彦「年譜」（『人物書誌大系 徳永直』（日外アソシエー

ツ、一九八二年五月）には、一九三二年「三月十五日から二十五日まで、作家同盟の信越地方巡回講演会が開かれ、下諏訪などで「プロレタリア文学について」を講演。」とある⁽⁵⁾。大井隆男は『農民自治運動史』（銀河書房、一九八〇年六月）で徳永の長野行きについて、以下のような証言を収拾している。

小須田命茂は昭和六年南佐久農蚕学校を卒業して村に消費組合を設立、プロレタリア文学に親しみ、日向仁四郎（南佐久農蚕卒、新聞記者）と同人雑誌『啓蒙』を出すなど活動していたが、徳永が取材に来て泊り、作品を『消費組合新聞』に載せ、また切原消費組合の看板を書いてくれたという。平林龍男も「徳永は畑八村にしばらく滞在しており、農民の姿を書きたいと言って訪ねてきた。野良着の軽装でどこの百姓かと思った。作品は『中央公論』に掲載された」と語っている⁽⁶⁾。

『中央公論』に掲載された「作品」とは、「文学サークル」である。小須田命茂は南佐久で小田切消費組合を組織していた⁽⁷⁾。「文学サークル」のモデルは、南佐久で活動を行っていた、この小田切消費組合であった可能性が高い。小田切消費組合はサークル誌発行も行っており、組合がサークルかというよりも、両者の特徴の混ざった組織であった。さらに南佐久周辺の様々な運動を参照して、物語化されていると言えよう。したがって、「文学サークル」の「N県M郡K村O部落」は長野県南佐久郡切原村小田切部落と特定できる。

本論は「文学サークル」に描かれた、地方の一九三〇年代サークル

表象は運動体同士の関係性をいかに描いたのか、を分析することを目的とする。「文学サークル」は農村青年をサークルへの動員の供給源として表象する。まず第一に農村青年の表象の検討によって、プロレタリア文学の動員の言説を明らかにする。第二にそのような描かれ方をした農村青年のサークル改革の言説を確認する。最後に、動員の供給源となった全農とサークルの関係性の中央からの承認の検討によって、「文学サークル」の言説を探る。

農村には多様なアイデンティティ承認や生きるための欲望が沸騰していた。過渡期的に組合と協力したサークルの表象は、農村青年たちの複雑な状況を刻印している。文学作品に現れたサークルの表象の意義づけを図りたい。

二 全農の青年表象―ポスターと講演会

まずは、サークルに参加する全農の青年、特に喜作がどのように作中で描かれているか、確認していこう。

「文学サークル」冒頭には村内会の掲示板がタイポグラフィで印象的に示される。「非常時日本の権威／金東成光氏講演会／於田町会館——×日午後二時／主催N県連合青年団」、禁酒会の「非常時日本を禁酒で救え」、「自力甦生はまづ節儉から」、東京の新聞の「日本の危機、国際連盟総会を注視せよ！」などのポスターである。玄関先には「五ヶ年節儉」の「木札」が貼ってある。掲示板も扉も「こんなポスターやビラでベタバタだ」と記述される。

農村はメディアによって盛んにイデオロギーが呼びかけられる場として描かれる。第一に、このポスター群の光景が、徳永が農村取材から得た、優れたイデオリアであった。徳永が描こうとした農村は単に封建制度の領土であるだけではない。それはイデオロギー闘争の渦中にある場なのだ。

農村にポスター群が大量にある風景は、農業恐慌以降、地方自治権が拡大した結果、現れたものである。「文学サークル」冒頭の描写は、封建的で平板な農村ではなく、近代的で流動的な農村の描写であった。

「文学サークル」に描かれた自治体は農業恐慌から脱するために、「禁酒」などの節約を求める。個人が農業恐慌対策をになう主体として村から名指しされる。村民は呼びかけられ、政治的意志を持つ近代主体である。そして、村民の支持はやがてプロレタリア文学に奪取される筋書きである。

ポスターのモニタージユの中を喜作は自転車で駆け抜けていく。「部落の青年喜作は、野良仕事の泥手も洗はずに、税金滞納の自転車に乗って、石塊の坂道を、一里ばかり距れてゐる田町へ、ふつとばしっていた。」と描写される。田町は長野市にあり、「税金滞納の自転車」には、限られた移動手段で南佐久から長野県全体を回る青年の性格が象徴されている。全農の青年・喜作もまた、日本共産党側に組織され、東京からの講演会に出席する政治的主体である。

小作の息子世代の農村青年は、開拓に動いたり、都市労働者として流出したり、左翼運動に参加したりする一九三〇年代特有の階級であった。農村青年は流動的な階級主体であった。彼らは優れて現実的な

労働者であったと定義される。「文学サークル」の表象は農村青年を積極的にプロレタリア文学の側に動員しようとする意図として読める。

「文学サークル」では、ポスターどおり「金東成光氏」が長野市内の「田町」に講演にやって来る。金東と「連合青年団の役員」、「K村長」、「地主」などが並んでおり、官民の連合が示される。「農村青年はお互ひの金で、有為な青年を東京に送り、たとへば金東氏らの塾で三年も勉強させたら、この非常時日本を救ふ政治家が生れる」と金東は言う。喜作は金東に、「まるで『夢』みたいな話じゃねえかと思ふですが……」と問う。「現に俺たちは沢さんとられてる××の中から、「大学」やその他で、……の卵を養つてるだが、この通りだ。「救農工事はどうしてくれるか」と喜作は批判する。

この金東成光のモデルは権藤成卿である。徳永直は「南信地方で見たり聞いたりした話」（『消費組合』一九三三年一月）において、「権藤翁或る村で講演をやつた。（中略）聴衆の一青年突如／＼「夢見たいだ」／＼権藤翁／＼「夢とはなんだ！」前青年／＼「永い間、東京の大学を出た偉い政治家によつてこんな農村は疲弊して終つたそんなこと信用して三年間待つたら農村はどうなるのか……」」と同様の対話が紹介している。権藤が長野で講演した事実を元に、「文学サークル」は作られた。

権藤成卿（一八六三—一九三七）とは、五・一五事件の指導者に理論的影響を与えたとされる農本主義者、大陸浪人である。明治年代は大陸での活動が目立つ。昭和年代にその自治思想を評価され、農本主義者として活躍する。農村に舞台を移し、救農工事の献策、満州移民

を積極的に勧めた。（滝沢誠『権藤成卿』紀伊国屋書店、一九七一年九月参照。）権藤の思想は農本主義でも古層にあたる（8）。

「文学サークル」の金東は派閥的で古い人間として描かれている。金東は「草稿」を見ながら、「ポツリ、ポツリ喋べ」る。「天下の金東」として青年たちに囲まれているものの、その話は「具体性」がないと描写されている。つまり金東は取り巻きの評価を取り払うと、直接的な批判には弱い人間として表象される。金東は現実に対し無知にも関わらず、保守思想の理想の場として農村を語る。

対して、「聴衆の一青年」から創作された喜作は、現実的な人間である。東京に出た人間の遊民性によって農村が破壊されてしまったことを喜作は批判する。金東の主催する塾という中央への誘惑も断つてみせる。「賃金不払で、製紙工場から帰農した」者達が描かれており、東京―長野間の往還は、工場失業と帰農、という形で喜作たちも持っているものである。

金東に話しかける喜作の言語は素朴さとローカリティを刻印されたものだ。喜作は「そうじゃねえですか」と方言混じりの丁寧語でしゃべる。金東と対照的に「声がでけえ」とされる。喜作は方言を使う、野蠻な青年として表象される。そして、ルポにはない、「文学サークル」の記述で付け加えられた点では、「救農工事はどうしてくれるのか」と農本主義と自治体の政策を問題化し、批判するのである。

ここでは右翼思想家よりも農村青年の方が現実を知っているのだと表象されている。国家政策によって窮地に陥った農村はプロレタリア文学こそが救済の術を持っているというわけである。喜作の論理は、金東という東京人から排除され、地方へ周縁化されると同時に、

農村浸透を目的とするプロレタリア文学中央の理論には一致すると設定される。喜作はプロレタリア文学の理想的な農民表象と言えよう。

喜作はサークルに既に所属しているマサをつてにサークルに参加する。喜作は「おらア、詩なんて作れねえだよ」と言い、「だつて『小説』なんか読んでるでねえか」と指摘され、「ん、『岩見重太郎』くらいならなあ」と答える。サークルは喜作のような全農には属していないながら、文学的にはけして明るいとは言えない農村青年たちによって、動員を確立し、その性質を変えていく。

自治体の儉約せよという呼びかけには騙されず、やがて闘争の場を奪取していく存在として農村青年は表象されている。右翼思想家という知識人にも彼らはローカルな論理と認識によって抵抗する。そこで描かれるのは野蛮さや周縁性であった。プロレタリア文学の表象によって、農村青年は周縁化され、地方空間に止まったままで、最も国策の弱点を認識し、排撃する労働者として理想化されているのである。このような理想化には、プロレタリア文学の母体として地方農村をまなざしていく視座があつたことは言うまでもない。

三 全農の青年によるサークル改革―サークル会合、救農工事座談会

「文学サークル」において、農村青年は大衆化の母体として表象される。サークルは喜作たち全農を受け入れてプチブル性を脱する。サ

ークルは全農による指導や協力をあおぐものとして定義されている。では、「文学サークル」において、全農のサークル改革はどのように表象されたのだろうか。サークルの会合で農村青年の言語が中心化される場面から見よう。また、救農工事が村の言語空間でサークルと全農に奪取される様子を見ていこう。

サークルのリーダーである一郎は「銀行がツブれて土地が人手に渡つたとき、潔く、東京の高等学校から帰つてきた」、没落地主出身のインテリである。一郎は「日本プロレタリア作家同盟の機関誌『プロレタリア文学』の……だつたし、すゝんで××××の通信員になり、サークル活動を始めた」。一郎はインテリとして表象されており、「あれじや文学青年以外にや喰ひつかねえだ」と批判される。喜作たちは「文学××をみただが……」「もつとガツチリした方針だ」と村内のサークルがプロレタリア文学中央の機関誌『文学新聞』の路線と一致しないことを知っている。

サークルの会合は一郎、おマサ、おちか、おてい、クリスチャンの林田、女学校出の英子、古い歌人の泉さん、「中学生」が出席している。そこに全農の喜作と安次、勝太が参加する。サークルは一郎を中心としたプチブルの子弟が多く参加している。おマサのみは例外的に初期から小作農の子弟と設定されている。

おていは、夫が出征しており、金貸しと姑にいじめぬかれている。おていは積極的なサークルの参加者というより、農村の因習の犠牲者である。おていは、おマサが声をかけることでこの一度のみサークルの会合に参加する。

「文学サークル」では、それぞれの登場人物が政治的象徴性を持つ

分断という要素を持つものの、小作であるおマサの言葉の方が、一郎や泉よりも会合の中で力を持つ言語とされる。おマサやおていは知識として一郎に勝る部分はないものの、方言混じりの言語の共感性によってサークルを変えていく。

全農とサークルは救農工事を奪取していく。救農工事とは、主に村有林の伐採などに賃金を払うという形で行われた自治体の農業恐慌対策である。国からそのための予算が支払われた。救農工事は地主の中間搾取で機能していない、という分析が小説内でなされる。それでは、小説内の救農工事批判がどのように行われたか検討しよう。

喜作は巧みに村内の言語を救農工事の話題へつなげていく。喜作は日常空間の会話から、救農工事の問題へ話題を変える。農村青年たちが「縄」を作り「勝太の家で「藁束をたゝいて」いる。五人の若者たちは「三分の二を「女」の話」をする。わいせつな会話からの流れで、ゴム工場で働いていた辰雄の発明「壁のぞき」が使用される。「壁のぞき」を使って、青年たちは「部落のおやぢ」たちの会合を覗き見する。おやぢたちは救農工事を話し合っており、村への「交付金五千元」という金額がはじめて農村青年たちに明らかになる。村への交付金の全額と一戸あたりを計算すると、地主の中間搾取があることが農村青年たちにここでわかる。

ここでは都会のエログロナンセンス文化が農村文化によって止揚され、真実の解明に生かされる表象がなされている。

救農工事は村有林を伐採しそれに手当を払う形で行われた。農村青年たちは山に登り、救農工事の入山禁止をアナキーに破る。喜作たちは救農工事を無視して、入山し、芝刈りをする。「文学サークル」

のこの描写は村民が救農工事に非協力的であった事実を物語化したものだろう。「村の失態を隠ぺいして官憲を背景に村民に弾圧」（『南信新聞』一九三〇年一月三日）によれば、村民大会が「『村民自身の山に入れ』と数日前よりどんぐり自由入山行動に移』つたと報道されている」。

一休憩した時に、貧農の岩吉おやぢに喜作は救農工事を話題にする。喜作は「「県評」の調査」の一戸「五円五十銭」の額を示す。岩吉おやぢはその全額をもらっていないかった。喜作は隣の「山×県」では「地主どもは「札」の権利を売った」ことを報告する。喜作は岩吉おやぢに委員会を提案する。

そして、農村青年たちは「珍妙な行列は、山裾の土堤道を、小さく、揺れながら峠の方へのぼつていった。先頭が三匹の馬で、紋付袴の村長、あとの二匹が洋服で、「県の役人」らし」い光景を目撃する。それは「救農工事の下検分」であった。青年たちは俯瞰的な視線で山から救農工事の現場を眺め、議論するのである。ここでは農村青年たちの山に登るといふ自然主義的な視点移動が、その救農工事問題の認識の改変に同期する技法が採られている。

やがてサークル主宰で「××工事座談会」が開かれ、「小田のとつゝまは語る」がサークル誌に収録される。政治参加を覗き見していた農村青年たちは村内のヘゲモニーを奪取し、自らの言語で発信していく契機を得たのである。

隣村の事例であるが、南佐久の田口村において、山林を「委員会を作り、合法的に活用」し、救農工事を行い、「返済なし」の「貸付け」で給料を分配した事例が記録されている。（「区有財産を不況対策に」

『南佐久農民運動史』前掲注7) 南佐久では実際に救農工事を全農側が奪取した事例が存在した。この「文学サークル」の描写は、このような救農工事の左翼側の奪取と一致する。

「文学サークル」ではサークル側は、大正投稿文学的であるか、「一九三二年テーゼ」以前のプロレタリア文学として象徴化されていた。農村青年たちが国策により欠損したアイデンティティを表象され、共感を呼ぶことで、サークルは改革される。ここでは農村青年は知的でない素朴な言語として一旦周縁化された後、プロレタリア文学中央の方針には一致すると中心化される。農村青年の欠損したアイデンティティの補填や救済は、サークルと全農の動員によって可能なのだという解決策が「文学サークル」では物語化されていると言えよう。

四 全農とサークルの関係性の中央からの承認と「断りがき」

「文学サークル」のサークルと全農の努力はサークル祭で劇的に大団円を迎える。サークル祭には長野支部から人を呼ぶという大きな文化事業の節目になっていた。サークル祭の大団円における長野支部とサークルの関係性、「断りがき」に見られる意味を検討しよう。中央からの示唆によるサークルと全農の関係性の変化を論じる。

「文学サークル」において、サークル祭の準備がはじまる。泉は農村問題によって拡大するサークルに抗議する。全農の支部員や演劇員、P・M（プロレタリア音楽同盟）を受け入れると、「文学サークルでなくなるじやないですか？」と泉は言う。泉という古い文学側か

らサークル改革に対する抗議がサークル祭直前になされたのである。一郎はこれを受け、「文化サークルの文化主義。」「文化サークルの××途中において、(中略) 独立出来ない少数の「演劇」「美術」などを、過渡的に包含してもいいかどうか？」と問題を整理する。これはサークルが全農の影響を受けてよいのか、という議論であった。

作家同盟N支部から「古川」という男がやって来てサークルと全農を肯定する。「古川は作同本部から……………、N県へ半年も「××」で駆け廻つて男だった。背の低い、四角い顔に始終笑ひを浮かべるやうな——戯曲「××教本部」の著者だった。」と描写される。戯曲「天理教本部」（『改造』一九三一年五月）の発表があり、長野支部での活動の認められる騎西一夫という人物がモデルとして推測できる⁽¹⁰⁾。

古川は、一郎が「正しいと思ふな、……………は、ドシドシ××の中へ広がらねばならんし」と答える。古川は「そのサークルでは、……………から七人以上却々延びなかつたんだ。全国にあるお山の大将的な、プチブル的な文学青年グループといふものは、ブルジョア文学が産んだ反影だ、勿論吾々は、これを××する、しかし……………」と言う。古川はサークル運動が地方文壇の反映に過ぎなかつたと批判する。古川はサークルが村内に支持を広げるには全農の協力が不可欠だと言う。古川は「吾々のサークルの××も、文学の栄養素も、基本は、こゝでは「全農」の……………しなくてはありっこないんだ。」とすら言いきってみせる。ここでははつきりと長野支部の古川による全農の動員が承認されている。

全農から農村青年層の支持を得、サークル人数を拡大し、中央と連絡を取るといふ筋書きを「文学サークル」は有していた。「文学サークル」はこの時点において、文化重視を否定し、全農を包含するといふ、政治重視の姿勢を描いている。

サークル祭は開催され、メーデー歌が響く。「文学サークル」は大団円を迎える(11)。地方農村サークルが全農の支持によって村内に広がり、サークル活動を成功させた形になったわけである。サークルの県支部を通じた中央との連絡や救農工事奪取による農村恐慌の解決は、プロレタリア文学の価値観においては、サークルの政治重視での成功を意味した。

ところが、「文学サークル」初出には「断りがき」があり、「サークル活動については読者は批判的に読んで欲しい」とある。初刊単行本には「断りがき」はない。

「断りがき」は、徳永の政治重視批判から書かれたと考えられるべきである。徳永とプロレタリア文学中央の指導方針は、「一九三二年テーゼ」に則っていた。だが、両者ともこの当時文化重視と政治重視の間で揺れがあった。のちに徳永は、「創作方法上の新転換」(『中央公論』一九三三年九月)において、サークル員のような「小説書く頭と一緒に指導されるやうな団体なら、それこそ嘆かましい観念団体だらう。」とプロレタリア文学中央の組合とサークルの混同を批判している。サークル側から、政治的な組合への協力を否定している。

連名の記事だが、徳永は「文学宣伝隊の必要」(前掲注5)において、小田切消費組合が参加した「創芽会(南北佐久)では、十七カ町村に亘るサークルの結成を、全農の統制下におくといふが如き、文化

運動の過少評価をやつてゐた」が、サークル独自の方針に変更された(12)と述べている。そもそもモデルはサークル誌も発行する消費組合だった。だが、中央からはそのような混雑は否定される。講演会后、創芽会は長野支部と中央に従い、方針転換している(13)。

「文学サークル」の全農とサークルの協力は、徳永の一時的な中央の政治重視への屈服である。文化サークルと組合の混雑の否定という形で、プロレタリア文学中央や県支部の権力が強化された。それまで、地方独自の状況を受け入れていたサークルは、プロレタリア文学中央の指示によって方針を決められることになった。重要なのは間違いであったとしても、地方におもむき、そこで政治重視解決の方策を徳永が一瞬でも見出したことである。「文学サークル」は、徳永のサークル理論が移り変わりゆく中で、見出された地方サークルの理想の姿だったのではないか(14)。

「断りがき」の批判は、「文学サークル」の作品内の農村青年の中心化という表象を宙づりにするものである。喜作たちの活動は見失われてしまう。一方、長野では支部下の統一が果たされる。サークル誌も出す消費組合というような存在は作品発表直後に姿を消してしまふ。農村青年たちの自己を周縁化しながらもつとも前衛的なプロレタリアとして中心化されるやうな表象は、「断りがき」によって疑問符を付されているのである。

全農に属した農村青年を動員対象としたサークルは「文学サークル」内で長野支部にその活動を認められるといふ筋書きになつていった。そのプッチブル性の清算は騎西一夫をモデルとする古川に評価されていた。だが、「断りがき」に「サークル活動については読者は批判

的に読んで欲しい」とのテキストが付されたことにより、その読みは百八十度転換する。全農を動員対象とすることは政治重視の現れであり、批判されねばならなかった。「文学サークル」は、中央部と地方のサークル方針の言説の揺れと過渡的な長野のサークル運動の様相を記述したテキストだと言えよう。

五 おわりに

これまで徳永直の小説「文学サークル」内の農村青年を動員したサークル表象を見てきた。農村青年層は小作農に設定されていた。工場で失業し、帰農した者も多い。彼らは全農に属しており、作品内では全農を通じてサークルに動員された。プチブル的なサークルは農村青年層の支持を得ることになる。農村青年たちは、方言を使い、周縁化されていた。その周縁性によって、農本主義者の右翼の古株よりも、農村問題を理解していたと、プロレタリア文学によって中心化されて表象される。国策によって欠損した農村青年たちのアイデンティティが、もつともプロレタリア的闘争を理解するものとして表象されていた。

ところが長野支部や徳永の動向と比較すると、このような農村青年の表象は、「断りがき」によって宙に浮いてしまったと言える。「断りがき」には全農の否定の意味が強い。しかし、そもそも「文学サークル」以前に全農と協力関係にあるサークル活動は描かれていなかった。組合かサークルかという問いがまず存在しなかったと言える。「文

学サークル」は、そのような問いの原初と捉えられるのである。

このような文化サークルの問題は戦後も残存した。一九五〇年代サークルでも地方文化と組合のどち重視するのかという問題は存在した。(道場親信『下丸子文化集団とその時代』前掲注1参照。)下丸子などの工場地帯では、工場組合に動員を置いたが、地方文化に根差したサークルも存在した。

そもそもサークルにとつて全農を母体と見なすことは徳永一人の問題を離れて、政治表象の問題を含んでいる。全農は合法部門であり、組合運動としても農村にアイデンティティを置く、特殊な組織であった。のちに全農は地下共産党に反対する多数派の母体にもなった。政治か文化かというサークルの方針以前に、そのような二項的な問いが混ざり合った状況を「文学サークル」は表象しているのである。「文学サークル」の言説構成を再検討することは、文化運動の地方における展開とその政治性を再考する際に意味があると言える。「文学サークル」は、二項の混ざり合った状況において、長野独自の活動の影響を受け、描かれた言うべきである。

地方における全農とサークルの関係性は相互流入的であったことがわかる。全農に属する小田切消費組合からも創芽会などへの出向が見られる。地方では文化サークルと全農の成員が同一であることは珍しくなかった。組織を次々に作るがその成員は同じという状況もあった。個人が様々な役割を兼任する状況があった。「文学サークル」は過渡期的なサークルの動員に対する問いを示したと言える。このような混雑は未組織性とも捉えられよう。しかし、地方青年の積極的なサークル活動の可能性とも解釈の余地があったと言える。

恐らく地方農村におけるサークルの展開を考えた時に、全農と手を組むことは、ある程度現実的だったのではないか。日本共産党が考えていた政治主義的な党母体とは、徳永の理解も越えて、日本共産党自体のことに他ならず、長野の一地方の組合などは母体とは考えられないだろう。

サークルと作品の言説構成を検討して判明したことは、恐らくは長野県の全農は、徳永が行った当初かなり理想的な状態にあったということだ。長野県南佐久には全農が早くから浸透しており、その土地に適した小作争議を展開していた。それは全農の動員対象である貧農からアイデンティティ的にもそれほど離れていなかった。後に完全な弾圧が下り、長野県の運動としては崩壊するものの、救農工事政策などでは一定の成果が見られる。

「文学サークル」における視覚は、農村をよく観察していると言える。モデルの長野県の運動の痕跡は「文学サークル」の中に刻まれている。「文学サークル」は長野の運動展開を様々な局面で撰取しながら表象している。サークルの救農工事施策は、農村青年の欲望や鬱積の発散として定義づけられる。

一方、「文学サークル」のあまりの矛盾点のない表象は、理想化されたものであった。「文学サークル」の表象が地方の欲望を満足させるものかどうかは疑問が残る。例えば、おマサの兄などは「文学サークル」では懲罰徴兵された設定であり、それがサークル改革のきっかけになっている。しかし、当時の農村青年が満州移民に積極的に自身の欲望を重ねていた可能性も残されている。農村青年表象は、移民青年のような姿は描かれてないのである。

また、農村青年を周縁化し、彼らこそが前衛的なだと表象したことも問題があるだろう。それは地方に原初的なもの、素朴なものを見出すという発想であった。このような態度は少なからず地方に対するオリエンタリズムの典型である。プロレタリア文学の方針と矛盾するような農村青年像は描かれなかったのである。

「文学サークル」という作品の射程は、戦後文化サークル、サークル性全体への問いまで収めている。農村青年をプロレタリア文学はどう表象するのか、地方性をどう表象するのか、がそこで実験的に試みられた。運動表象のかなりの部分が事実と重なり、高度に物語化されている。「文学サークル」は過渡期の農村の運動体を刻印し、サークルと組合の関係性を問い直した小説であったと言える。

注

(1) 道場親信『下丸子文化集団とその時代』（みすず書房、二〇一六年十月）などが代表的な一九五〇年代サークルの研究として挙げられる。

(2) 一例を挙げれば、水野秋は、『岡山社会運動史』8 暗い谷間で『(労働教育センター、一九七八年八月)において、「いずれの関係者も「党とともに」、「党のために」と異口同音にのべており、少なくともその時点では「政治の介入」の問題性をいささかも疑うどころか、政治的決定的優位性を強調する蔵原理論をほとんど盲目的に承認していた事実をじつに率直に認めているのである。となれば、これらの運動の本質は、いわゆる文

化運動というものではなく、政治運動における異色な表現であったとすらいえなくもない。」と結論づけている。水野は一九三〇年代サークルを「党」や「政治の介入」を疑わない「蔵原理論」、つまりは「一九三二年テーゼ」の盲信と規定している。それは文学研究の対象となるような「文化運動」ではなく、「政治運動における異色な表現」であった、つまり政治運動の文化部に過ぎず、評価に値しないと言う。

(3) 全農とは全国農民組合の略である。特に全会派は日本共産党の支持のもと、小作争議を繰り広げていた。

(4) 久米正雄は「余りに歪み過ぎた徳永直の作品」（『読売新聞』一九三三年一月六日）において、「文学サークル」を論じている。久米は一郎の活動を「清算し切れない」ために、「此の作者の眼は極めて意地悪く、濁つて、小人めいて感じられる。」と述べた。しかし、中央文壇に長野サークルの情報は明らかになっていないかった。

一九三〇年代サークルとプロレタリア作家の関係は、池田啓悟が「第二章 〈接点〉の発見―中條百合子「舗道」論」（『宮本百合子における女性労働と政治』風間書房、二〇一五年四月）において、サークル内から発見された「女事務員」という表象を検討している。池田は百合子が興味を持った女性労働者の表象とプロレタリア運動とは切断があったことを指摘した。しかし、地方サークル運動の表象は検討の対象になつていなかった。

(5) 作家同盟の信越地方の報告文、「文学宣伝隊の必要―長野県下

をめぐつた経験から」（『プロレタリア文学』一九三二年五月）には、「江口漢、池田寿夫、徳永直の三人、長野県下講演隊が出発したのは、三月十五日早朝であつた。」とある。巡回した場所は「下諏訪」、「飯田町」、「龍江村」二カ所、「伊那村」、「長野市」、「上田市」、「中鹽田」、「野澤町」、「栄村」の計十カ所である。三人の講演隊に途中で後述する騎西一夫などが合流した。

(6) 小須田命茂 一九一二年〜二〇〇八。小田切消費組合創立組合長。戦後、切原農民組合創立組合長。白田町議員などを歴任。

（『南佐久農民運動史』南佐久農民運動史刊行会、一九八三年三月）日向仁四郎 一九一一年〜？。『信濃毎日新聞』記者。全農切原支部結成活動。戦後、切原農民組合結成活動。市川市へ移住。（『南佐久農民運動史』前掲参照。）平林龍男 戦前、南佐久で青年団自主化運動に参加。「土の会」の農村文化運動に携わる。（大井隆雄『農民自治運動史』前掲参照。）

(7) 小須田命茂らの活動については、『南佐久農民運動史』（南佐久農民運動史刊行会、一九八三年三月）の「小田切消費組合」の項に記述がある。「当時、十二新田では日向仁四郎、小須田命茂、小林幸助、小林一郎、石井和太郎らが『啓蒙』、井出米蔵らが『赤土』という同人雑誌を発行していた、と言う。一九三二年「春、（中略）徳永直が小須田命茂宅に来ており、夜はみんなが集まって話し合うことが多かった。」と回想している。

(8) 『長野県上小地方農民運動史』（上小農民運動史刊行会、一九

八五年四月)には高遠熊次郎が「座談会 西塩田小作争議を語る」において、「評価じゃないが、あの頃はちょうど権藤成郷(ママ)が希望社つてやつね、燎原の火の如く、若い、特に女子青年団やああいう人達が、上田市の公会堂なんか、いつでも溢れるように一杯になった。権藤成郷(ママ)が来て本調子でやつて。」と講演を証言している。

- (9) この他、救農工事に関する農村の対立は、現代の研究では、小島庸平「大恐慌期における救農土木事業の意義と限界―長野県下伊那郡座光寺村を事例として―」(『歴史と経済』二〇一一年七月)において検討されている。

- (10) 騎西一夫(松本一二三)一九〇七―作家同盟長野オルグとして活躍。一九三三年九月検挙。獄中細胞として抵抗。敗戦後、『赤旗』の発行責任者や東京で日本共産党要職を歴任。(『近代日本社会運動史人物大事典』日外アソシエーツ、一九九七年一月)騎西一夫は「上小地区での文化活動」(『長野県上小地方農民運動史』前掲)において、橋本英吉から「長野オルグ」に任命されたことを回想している。騎西は橋本や徳永の代りに長野支部という名目で各サークルを集結させていた。

- (11) 「文学サークル」において、「P・M」(プロレタリア音楽同盟)のメンバーは弁士中止をさえぎって、「――ばんこく――の……どうしや」とメーデー歌を歌う。この事実に近いものとして、茂原繁は「プロレタリア文化活動」(『南佐久農民運動史』前掲)において、「昭和六年五月音楽家同盟委員長の関鑑子が(中略)来佐、佐久音楽同好会の仮名で望月、野沢、小諸

などで音楽会を計画した。第一回の望月の独唱会は大成功であった。プログラム終了後聴衆のアンコールにこたえて関鑑子がメーデー歌を歌った。」とある。

- (12) 創芽会 南佐久において茂原繁を中心に作られたサークル。機関誌『創芽』を発行していた。小田切消費組合の日向仁四郎も参加していた。(『南佐久農民運動史』前掲)

- (13) 南信支部準備会「第五回大会の成果と南信地区」(一九三二年五月)のビラ(『昭和戦前期プロレタリア文化運動資料』丸善雄松堂、二〇一七年一月所収。)に「極左的政治的偏向」として全農との協力が自己批判されている。

- (14) 内藤由直は「プロレタリア文化運動における組織の問題」(『革命芸術プロレタリア文化運動』森話社、二〇一九年二月所収)において、徳永と林房雄は、宮本顕治らの政治重視の文化サークル方針を、作家を疲弊させ、冒険的な地下活動を支持させるものだと批判したと論じている。

付記

本論は昭和文学会第61回研究会「徳永直「文学サークル」論―1930年代の農村における文化活動の群像―(於専修大学、二〇一七年二月九日)の発表を改稿したものです。当日は和田崇氏と金野文彦氏から貴重なご意見をいただきました。

(まんだ けいた、広島大学大学院文学研究科博士課程後期在学)